

医学系図書館員への期待

ーエビデンス・ナラティブ情報にどう向き合うか？ー

中山 健夫

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野教授

1991年にカナダの Guyatt が提唱した根拠に基づく医療（Evidence-based medicine: EBM）は、質の高い医療を求める社会的な意識の高まりと共に、さまざまな臨床分野で普及した。EBMは「臨床家の勘や経験ではなく科学的根拠（エビデンス）を重視して行う医療」と言われる場合があるが、本来は「臨床研究によるエビデンス、医療者の専門性・経験と患者の価値観の3要素を統合し、よりよい患者ケアのための意思決定を行うもの」である。

臨床研究によるエビデンスは、人間集団を対象とする疫学的な研究で明らかにされた「一般論」である。臨床試験、特にランダム化比較試験を中心に、さまざまな介入（治療・予防）の有効性を評価するシステムティックレビューを実施し、そのデータベースを構築しているコクラン共同計画は、定量的なエビデンス情報の代表と言える。近年では、多くの疾患に関して EBM の手法を用いた診療ガイドラインが作成され、臨床現場で利用されている。診療ガイドラインとは「特定の臨床状況のもとで、適切な判断を行うために、臨床家や患者を支援する目的で系統的に作成された文書」である（米国 Institute of Medicine）。国内では現在、財団法人日本医療機能評価機構の医療情報サービス事業”Minds”が、診療ガイドラインを公開すると共に、診療ガイドラインに基づく独自のコンテンツを充実させ、また診療ガイドライン作成者に継続的な情報交換の場を提供している。

エビデンス、そして診療ガイドラインが臨床現場で重視されるようになる一方で、一般論だけではなく、患者の体験、語りといった個別性の高い質的な情報への関心も高まりつつある。EBM のオピニオンリーダーでもある英国の Greenhalgh は Narrative-based medicine (NBM) を 1999 年 BMJ 誌上で提案した。国内でも英国の”Healthtalkonline (旧 DIPEX)”と連携して、NPO 法人健康と病いの語りディベックス・ジャパンが、がん患者のインタビューに基づき、動画で「語り」情報を提供している。

医療、健康をめぐる社会情勢の中で、情報を意思決定、問題解決に適切に活用できる能力、健康情報リテラシー（ヘルスリテラシー）の向上は、医療の提供者、その関係者、そして医療の利用者のいずれの立場でも、従来以上に必要とされていくであろう。医療・健康に関する情報を扱う専門家である医学系図書館員は、医療関係者をはじめ、さまざまな立場の人々のリテラシーを支える役割を持つ。講演では、医療・健康情報の現状をエビデンスとナラティブの視点から概観し、これからの医学系図書館員の可能性と期待を述べたい。

[参考]

Sackett DL, et al. Evidence based medicine: what it is and what it isn't. BMJ. 1996;312(7023):71-2.

Greenhalgh T, Hurwitz B. Narrative based medicine: why study narrative? BMJ. 1999;318(7175):48-50.

中山健夫. 健康・医療の情報を読み解く：健康情報学への招待. 東京：丸善出版, 2008